

○日 時：令和6年3月7日（木）午前10時05分～12時

○場 所：京都市生涯学習総合センター 3階第4研修室

○出席委員：[9名中6名出席]

岩崎 れい 委員  
梶川 敏夫 委員  
後藤由美子 委員  
高田 敏司 委員  
谷口かおり 委員  
西 健児 委員（五十音順）

○欠席委員：3名

○傍聴者：0名

## 1 開会

### （1）中央図書館長の挨拶

京都市も市長が変わったこともあり、新たな出発をしたいと思う。

ワシントンDCにホロコーストの美術館に行ったことがあるが、その美術館がどのような特徴で運営しているかと言うと「クエスション」疑問である。「クエスション」のミュージアムと言葉で読んでいる。「クエスション」という言葉はあらゆるところで応用できる。クエスションというものは我々も話題にしていたことだと思うが、ミュージアムなのかライブラリーなのかというところが大きく違う。私たちはクエスションのライブラリーを作ることが中心だと思った。

前橋市の選挙で新人が勝ったが、前任は「分裂やしこりがあったこと」や、「慢心だった」と書いていた。すべてが心の問題である。

私達も慢心になっているのではないかと思う。委員の皆様の意見を私達に伝えていただき、慢心せず心を引き締めてこれからも図書館づくりをしていきたいと思う。

## 2 報告事項

### （1）石川県七尾市への電子書籍サービスの提供について

事務局から、資料に基づき、「石川県七尾市への電子書籍サービスの提供」について報告した。

京都市図書館では能登半島地震の被災地支援として、電子書籍サービスの提供を2月5日から開始している。資料に七尾市民への案内文を添付しており、これを七尾市の教育委員会を通して学校掲示や図書館のホームページに掲載していただいている。

能登半島地震の被災地への支援については、関西広域連合で調整し、分担して支援していくこととなっており、京都市は、支援先となった七尾市に対して避難所運営への職員派遣などを行っている。こうした中、京都市図書館としても支援策を検討した。

阪神淡路大震災の際には移動図書館を避難所に派遣していたが、派遣できる範囲・日数も限られた。特に今回はより道路事情も厳しいといった状況もあり、電子書籍サービスの提供であれば、より広く、長い支援になると考えた。

ただし、これまでも報告しているとおり、図書館から市民に提供している電子書籍は京都

市の所有物ではなく、あくまで提供元である図書館流通センターとのコンテンツの利用契約により、提供できているもので、無断で対象範囲を広げることはできないものだが、図書館流通センターと協議したところ、承諾を得られ、実施できることとなった。

また、提供開始に合わせて、一般の電子書籍だと1人が借りていると他の方は利用できないものとは異なり、複数の方が同時に読むことができる「児童書読み放題パック」338点分を追加の予算で提供できることになった。

登録方法はできるだけ簡素化し、氏名、ヨミガナ、生年月日、住所をメールで送っていただければ登録できるようにした。京都市民の場合は証明書を確認することが必要だが、七尾市民の方には、特に証明書等は求めずに登録できるようにした。

利用期間は令和6年7月末までを予定している。

本日までに、68名の方に申込みいただいており、申込みのメールに、お礼を入れていただけている。また、先日、京都新聞に七尾市の方からの投稿が掲載されており、「地震後の忙しさやしんどさで読書から遠ざかっていたが、このサービスを知り、再び本を読もうという気持ちになれました」とのお声をいただいている。

七尾市立図書館も3月1日まで再開できず、今も午後1時から4時30分までの開館にとどまり、土日・祝日は休館している。こうした形で読書を求める方に届けることができ、良かったと感じている。

## (2) 京都市図書館電子書籍サービスの利用状況について

電子書籍サービスについては、令和5年2月10日から開始し、1年が経過したのでこの間の利用状況について報告する。

コンテンツ数はスタート時の3768点から令和6年2月末現在で4665点となる。うち児童書読み放題は338点である。

貸出点数を月毎に見ると、令和5年2月は、約20日間で7000点、予約も多く入り、すぐ借りていただけるものも減ってきたということもあり、令和5年度に入ってから月4,000点前後、1日当たり130点に平準化している。この間、新着資料も入れていき、そのことで、令和5年12月、令和6年1月は増加してきている。

配布資料の電子書籍と一般の書籍等の年齢別の貸出点数のグラフをご覧いただきたい。電子書籍のご利用は、一般の書籍と比べて、31歳～60歳に集中していることが特徴である。一般書籍のように12歳までや71歳以上のご利用が少なくなっているが、相対的に23歳から30歳の層にも電子書籍が利用いただけている。

七尾市への支援についてニュースにさせていただいたことで、京都市の図書館で電子書籍サービスを知っていただいたということもあり、今後コンテンツ数の充実とともに、さらに周知を図っていきたいと思う。

なお、参考に、前回の登録率を見ていただいたが、年齢別の登録者数につきまして補足させていただきます。

特に高齢者は母数（その世代の人口）登録率としては低く出ているが、登録者数は多い。まだまだ登録していただける余地があると思う。今後も図書館サービスの充実や様々な周知を検討していきたい。

### 3 協議事項

協議事項である「図書館の魅力とそれを伝える取組」について、事務局から以下の事項を説明した。

前回の協議会では「読書の魅力について」ご意見をいただいた。

今回は、そうした読書の魅力を伝えていくことが図書館の大きな役割であることを踏まえて、「図書館の魅力とそれを伝える取組について」をテーマとして協議いただきたい。

次第には、図書館の役割や機能、特徴として考えられるものを、例示として6点挙げているが、こうしたことを魅力として感じていただければ、もっと利用いただけるのではないかと考えている。

そのために、こうした点について知っていただくことが大事であり、配布資料である図書館情報誌「京図ものがたり」を見ていただきたい。司書のおすすめする本の紹介では、内容紹介にとどまらず、「読書の魅力を伝える」ことを意識して作成している。

「生涯学習支援」の例としては、大河ドラマに合わせた2・3Pの特集で、平安時代の文化風俗を紹介するなど、機会をとらえて、様々なことに興味をもっていただいたり、深めていただけるように工夫し、そのために多様な分野の資料をそろえている。

「課題解決・生活支援」としては、「あなたの知りたいにこたえる」としてレファレンスサービスの事例を毎号紹介しており、今回は図書館の「データベース」を使った例を紹介している。また、生活の様々な場面で必要となってくる情報、実用的な書籍を提供できるようにしていく。

「子育て支援」に関わっては、早くから本に触れていただけるように、0歳から図書館カードを作ってもらえることも紹介し、赤ちゃん行事の際には、保育園等の協力を得て、子育て相談を実施するなど子育てに役立つ図書館であることを意識している。

こうした取組の核になるのは「司書の存在」であり、以前にも紹介した子どもの本コンシェルジュなど司書の存在を感じていただくことができれば、それが図書館の魅力になっていくと思っている。

「場としての図書館」については、市民の交流の場として、また、家そして職場や学校、それらに次ぐサードスペースとしての図書館へのニーズが高まってきているといったことに応じていくこと、京都市図書館は施設面での制約があるものの、そうしたニーズに応じていきたいと考えている。

他にも図書館の魅力としてアピールできる場所はどこかといったことや、取組自体が不十分、あるいは知っていただけていない、どうアピールしていくかなど、委員の皆様からのご意見をいただけたらと思う。

### 4 協議事項に関する意見

意見 前回、本がそもそも好きな人ではない人に、どう広げるかといったことを第2回の時に話し合っしてほしいということで会議が終わったと思う。確かにこの「京図ものがたり」はすごく面白いと思っている。もっとたくさんの人に読んでもらいたいと思う。

これは図書館の編集部で作っているのか、外部に発注したものなのかと思う。面白いものなのでもっと広げたいと思う。

先程のサービス利用状況の話聞きながら、予算はどうなのかと思う。電子書籍は紙の本よりも高いということも聞いている。国で予算化してもらえてるのかと思ったりも

する。現在の図書費がどれぐらいの規模なのか。予算がなくては具体的に考えにくいところがあるので教えていただきたい。昨日に子ども読書推進のための懇談会という会議があり、今、子どもたちにどのようにして本を伝えていくかということ、それぞれの立場で取組がされていることはすごく感じた。京都市の場合、市長も変わったので新たに懇談も行いたいと思う。

最近、様々な図書館ができつつある時代である。指定管理や民間が入り、そもそもの図書館と違う方向に行ってしまうこともある。直営で市が行っている図書館もあるが、一度、図書館協議会のメンバーで他都市の図書館見学に行きたいと思っている。

協議会として何か新しい図書館を提案できればと思う。滋賀県立図書館は全体的にいろんな情報や研修をされている。それぞれでホームページ見るだけでもいいと思う。予算の事もあがるが、新しい市長とも相談していけたらと思う。

意見 京都市図書館の予算はどのようになっているか。

回答 予算としては、規模が小さかったり、新しい図書館を建て直すとかは、なかなか難しい中で、書籍の充実はやはり必要だということで長年要求をしている。図書費については他都市と比べても比較的確保できていると思っている。ただし、行財政改革計画の中で、市全体で少しずつ削減を協力してほしいということで、長年あまり手をつけられてこなかった図書費を少し減らしている状況である。ただし、減らしただけではなく、新しい必要なサービスとして電子書籍サービスを開始した。全体としては大きく変わっていない。

意見 私の若い頃は過去の生活をそのまま引き継いでいけばいいという時代だった。最近の20年は変化が激しく、物の見方も変わってきている。社会の移り変わりもあるが、図書館を昔のまま続けるわけにいかない。ということもある。それをどう考えて変えていけばいいのかを、改めて考え直さなければいけない気がする。

特に私は学生と23年間ほど関わってきたが、やはり図書離れというのは実態にある。皆さんご存じの通り、電車に乗っていても、今までは週刊誌とか本を読んでいた人がたくさんいたが、最近ではほとんどの人がスマホを見ている時代である。

本離れは実態としてあると思うので、その中で一体本をどうして興味持ってもらってもらえるかということも工夫していかなければならない時代という気がする。今回配布の京図ものがたりの中で、平安時代の貴族の生活の記載があるが、私は、2007年2008年に京都市内に40か所の源氏物語に関する場所に説明板を立てた。要するに部屋の中で勉強するということも含めて京都の場合はフィールドがあるので活かしながら、コンシェルジュの方も学習していただいて、実際現地へ行くような変化をすることも必要だと思う。様々なことも取り入れながら、図書館の活用をいかにしていくかというのはこれから大きな問題だと思う。例えば、専門的な知識を持っている方が必要である。京都の場合は、京都市民の方が文化財に対する教養が少ないということがある。実際、地元の近くにたくさん文化財があるのに全然知らないことがある。京都ならではという学習ができる、知識を得ることができるということについては、京都はすごく価値のある都市だと思う。それを図書館がうまく活用しながら運営する中で、専門の方を育成するというよりも、実際京都市役所の中にはたくさん文化財の専門家がおられるので、活用しながら運営していくことも必要だと思う。特に京都アスニーでは講演会を行っているが、その中でも京都市の埋蔵文化財研究所の職員の方が研究を発表されている。市の文化財保護課も同じように専門的なことを講演している。そういった方たちと、図書館

の専門の方とタイアップしながら新しい魅力を見つけないかという気がする。図書離れが多い中で、意外に図書館あるいは図書館に関係したそういったフィールドも含めて興味持つ方法がこれから作れないかという意見を持っている。

意見 図書館の魅力ということで、子どもたちが足を運びたいくなる図書館作りを小学校としては取り組んでいる。図書館にいろんな大人が関わっている。その大人がどういう役割を担っていくのかと言った体制作りが必要と思っている。京都市の取組としては、校長会の研究会にも関わっているが、読書ノートというものがあり、読書ノートには図書館の貸し出しのバーコードを貼る。子どもたちがその読書ノートを持ってきて貸し出しをしたり、返却をしたりする。そのノートの中に「こんな本を読んでみましょう」とか「こんなジャンルの本を使ってこんなことを調べてみましょう」といったものが、クイズ形式等で書くことで、それを持って子どもたちが図書館に行きやすくなる。行きやすくなる状況を作るための仕組みとして、各学校の図書主任が、図書館に関わる図書ボランティアの方、司書の先生と教職員をコーディネートしていくといった体制をしっかりと作る必要がある。体制を作らないと、各々が勝手に図書館に足を運ぶだけでは、魅力的な図書館にはならないと思いコーディネートをしてきている。役割としては児童にどのように関わっていくのかという役割や、どのように施設を充実させていくか等、色々な相談を行う。具体的な取組としては、例えばある学校の場合だと、図書館司書の先生が週に木曜日と金曜日の2日間、図書ボランティアの方は火曜日の午後からは図書館にいていただける。子どもたちは開放日、開放時間がたくさんある方が当然足を運びやすくなる。足が運びやすくなる条件を整えていく。その他の日は、子どもたちが中間休みや昼休みに図書委員が開放する。その際は、図書委員の担当の先生がついて、その時間を担っており、全ての曜日の時間に子どもたちが自由に動ける時間は図書館が開放されているという状況を作ってあげることが、体制作りの1番と思っている。そんな中で具体的な取組として、図書ボランティアが読み聞かせ会のようなものを、週に1度に必ず学校に来られる日に、様々なクラスに紹介を行い、そのクラスの担当がその時間に予約を取って聞きに行く。司書も同じようにブックトークをはじめ、様々な会を準備して下さっている。各クラスで予約したクラスが聞きに行くといったことで必ずそこに足を運ぶ機会を図書ボランティアと司書で設けていただいている。

担任については授業の中、例えば国語の授業であれば「本は友達」という単元があるが、単元の時、もしくは調べ学習等で、「授業で図書館が使えるところは図書館を使っていきましょう」ということで足を運んでいく。子どもたちがその授業の中でも足を運ぶ機会を増やしていくことを行っている。

まずは必然的に子どもたちが足を運べるようにしていく取組をしていると、子どもたちが本に興味湧くようになる。委員会活動の中で司書もしくは、図書ボランティアと様々な計画をしている。

学校全体としては、教育委員会で実施している読書100冊マラソンというものがあり、100冊読んだ子どもたちを集会等で表彰している。子どもたちが頑張ったことを認めてあげることも必要だと思う。また、子どもたちが面白かった本を紹介するコーナーを図書室の近くにあり、様々な本の紹介をするコーナーに、たくさん紹介してくれている。そこに展示していくことで、「こんな本を読めば面白い」といったことが、同じ学年の子どもたちだけでなく一つ下の学年の子どもたちに紹介できるような内容で書いてくれている。

まずは、自分自身が感じているのは教職員が図書室に足を運ばないと、魅力が伝えられない。様々な小学校で実施されている選書会では、子どもたちだけの選書会もされているところもある。

ただし、そうすると子どもたちは読みたい本をたくさん選んでくれるが、9類の本に偏ってしまい、物語ばかりになってしまう。授業の中で必要なものは何かを、まずはその教員が選書会に関わって選んでいくことで、教職員も足を運ぶ機会を作っていくことも魅力ある図書館になると思っている。

意見 私には小学生と中学生と高校生がおり、生活の中での図書との関わり、図書館との関わりということを考えて話をさせていただければと思う。

先程の委員の話にもあったように小学校の図書教育というものは本当に大変充実していると思っている。子どもたちが幼稚園や保育園に入るまでは、親の手によって紹介したり、読み聞かせをするところから、小学校に入って少し手が離れたら先生方や学校司書、ボランティアの皆さんからたくさん本の情報をいただいて6年間過ごさせていただいて大変ありがたく思っている。ただし3人子どもがいる中で本好きな子と本に興味を持たずに過ぎてしまった子がいる。私は同じように、同じような本を読み聞かせをしてきて、小学校教育の中でも同じように体験をさせていただいたはずなのに、このうちの1人だけどうしても本を読まない子がいる。なぜか考えた時に少し思い当たるのが、本好きな子2人は同じ担任の先生に見てもらった。5年生6年生で読書を浴びてきているということを感じる。クラスの後ろには先生おすすめの本や、先生の好きな本が置いてある。そして、授業の中でも国語の単元の中からどんどん派生して「同じ作者の本を読んでみよう」とか、広げていただいた先生に受け持ってもらった2人は、今でも本を読むのが好きである。先生のおすすめの本を自分で更に広げ、京都市図書館で、自分で予約を入れて広げていく。ということをしていたのは、ある先生のおかげだと感じている。学校司書やボランティアの方が同じように協力をいただき、活躍いただいているが、担任の先生や小学校の先生一人一人に、本好きになってもらえたら子どもにも図書の良さ、図書館の良さというのも広めていただければと思う。先生任せにするわけではないが、やはり先生の話は本当に素直に聞くし、特に低学年とか「先生おすすめ」と言うと、すごく読むこともあるので、先生方に本を広める活動が必要だと思う。若い先生にも広げていっていただきたいと思う。

中学生や高校生とかになると図書館の活用方法は、調べ学習であるとか読書の場というよりも勉強の場になる部分が多いが、息抜きで、少し興味がある本や、気に入った本を手にとれるような環境が維持できればいいと感じている。

意見 電子書籍サービスの部分で質問がある。自分でも使用しており、大学で教えている大学生達に聞くと、彼らは、生まれた時からスマホを触っている。

スマホでは縦読み、縦に流すことが多い。サブスクリプションの書籍サービス等は縦読みか横読みを選択できたりする。あれは技術的には難しいのか。簡単に設定ができるのであれば、若い子達は横読みが非常に読みにくく慣れていないので選択できるようになればいいと思う。

回答 システム自体を我々が作っているわけではないが、電子書籍も含めて従来の図書、そのものスタイルに合わせていると思う。確かにネット記事等は、本来縦書きで配信されているものを横書きにして配信している。それについては、今後のニーズによって変わっていくと思う。業者のシステムが横読みになっており、縦読みに変換する機能はつい

ていない。

意見 サブスクリプションやサイト等は縦読みか横読みを選択できるようになっている。

図書費が減っているということだが、京都市図書館でもリクエストカードがあり、リクエストして購入してもらえるのだが、昔に比べると購入率は減っているのか。誰が決めていてどのように決まっているのか。

回答 リクエストされた資料は、基本的に受け付けた図書館が選定会議等を通してその購入を決定する。購入できない資料は、相互貸借という、他の自治体が所蔵している本を取り寄せて貸し出しするというサービスで対応している。利用者の資料要求には、できる限り応えていくことが図書館の役割と考えている。

意見 それぞれの図書館が持つる予算の範囲内で検討しているのか。

回答 各図書館に配分された予算の中で検討している。地域館と中央館では予算配分額も異なるため、地域館で高額資料のリクエストが入った場合は、4つの中央館が分担して購入の支援を行っている。

回答 右京中央図書館の場合、毎週1回リクエストについて選定会議を行っている。

買わない場合は、どういった理由で買わないのかということについて分類をしている。すぐに判断できるものもあるが、1つのリクエストに対して下調べ等も行いながら会議で選んでいる。予算を使うため、既にある本については他の館から経由して借りられるのであれば買わないし、買わないといけない場合には予算の範囲内ということになるが、予算がないから購入しないということはあまりない。

意見 リクエストの採用率はどれくらいなのか。

回答 1人でたくさんリクエストされる場合もあるので一概には言えないが、基本的に問題なければ買うというスタンスで考えている。購入しない場合は、問合せがあったときに、理由が言えるようにしている。

回答 中央図書館も週1回司書と課長・係長が集まって会議をしている。リクエストを全て受け入れると、資料が偏ってしまうこともある。同じ類書があれば断ることもある。大学の図書館にあるような専門書の場合についても、その他の方が借りることが見込まれないと判断した場合は、購入せず大学図書館を紹介するなど、府立図書館にあれば相互貸借制度で借りれるということを紹介することもある。図書館全体の構成を考えて判断している。

意見 市長選で松井孝治さんが新しく市長になられた。松井市長は、「新しい公共」と言われている。予算を戦略的に増やすために、市教委や図書館がどのように予算を増やしていくのかを検討する必要がある。松井市長も市民の方と話をしたいと言っておられたので、先程意見があったが市長と話ができればいいと思う。

松井市長が言う新しい公共では、教育文化による文化市ということを言っておられる。そういった点では「場としての図書館」という役割を改めて強調することも必要だと思う。

国の予算においては、働いている人の学び直しを指すリスクリングというものは非常に予算がつきやすい。生涯学習というどうしても高齢者の方がイメージされるが、リスクリングというと、働いている方が新しい学びを身に付けるという点でも、図書館というのは新しい場として活用するということを訴えていくと予算をとりやすいように思った。

意見 今いただいた意見の中から3つに分けてもう少し議論を深めたいと思う。

1つ目は「京都市の図書館をどう魅力的にするか」ということで、他館の取組をも少し見てみたらいいのでは。という話があった。

2つ目は、学校の役割、学校と公共図書館との関わりについて子ども読書の推進をどう考えるか。

3つ目は、図書館の新しい役割として、専門分野や、リスクリングの考え方、それと絡めて、選書の方針が公共図書館は今までとどうなのかというところも深めていければと思っている。

まず他館の取組について、他館の取組を見ることはいいことだと感じている。

協議会の委員で他館に行くことは予算的にも時間的にも難しいと思うが、例えば他館の取組を知ってる方にスクリーンを使って、写真で取組を紹介し合うといった機会を設けることも検討してもいいと思う。

現在住んでいる自治体の図書館というものがメインで考えてるかもしれないが、実は大都市である東京や大阪での取組や、地方の自治体での取組もある。少しの時間を設けられたらと思った。事務局で少し検討していただければと思う。

2番目の学校の役割については、小学校・中学校・高校を考えた時に、公共図書館の利用率はあまり高くないと思う。小学校はまだ高いと思うが、基本的には学校図書館を日頃使う子どもたちが多いと思う。

先程、委員から様々な取組を紹介いただいた。熱心を実施されていると思うが、熱心な学校と熱心でない学校や、クラス担任によっても違いがあることは感じている。子どもにとっては家庭と同じように選べない環境である。

しかし、家庭とは違い、学校はある程度の水準を保つことができると思う。他にもやるものがたくさんある中で先生方も大変だと思うが、公共図書館がどんな風にサポートできるのか検討が必要だと思う。

読書習慣が1番身につく小学校の段階で何ができるのか、学校司書も学校にいるが週2日間で、様々な方が担当されている。学校司書によってもやり方が違うと感じる。その中で標準化することはなかなか難しいと思う。学校図書館はほとんどが1人職場であり、熱心な司書の方もおられるが、担任との掛け持ちで忙しいと思う。そこで、学校図書館と公共図書館での連携をもう少し持てたらいいと思う。

3番目として「図書館の新しい役割」が公共図書館にとって課題だと思う。例えば、私自身、子どもの頃は公共図書館をよく使用していた。公共図書館に置く資料が当時と同じような資料になっている図書館が多いように思う。「利用者のニーズは同じでもいいのか。」「図書館離れの場合、本を読まなくなったから離れているのか。」「図書館に自分の希望の本がない。」ということで離れているのか。様々な課題があると思う。

様々な生活がある中で物の見方も変わっていくので、もう少し専門分野のことを考えてもいいと思う。公共図書館で全てを網羅することは無理なので、文化財の部署と連携して一緒に展示やイベントをすることも考えたらいいと思う。

まず、他館との取組についてご意見をいただきたい。

意見 図書館友の会全国連絡会というのがあり、民営化や指定管理になった場合の事等記載しているものもあり、職員の働き方の事等も記載してある。そういうものを見ることもいいと思う。

静岡市や、横浜市は、市民が参加して新しい図書館を作ろうとしている。ハード面

やソフト面に市民が参加できるといいと思った。

意見 他館の取組を見た場合、確かに民営化の問題は予算の問題と関わってくることもある。安くするということは人件費を安くしていることなので、決していいことではないと思う。労働条件がもし悪くなった時にサービスも下がってしまう可能性もある。

また、利用者の視点を入れていくことについては、アメリカの場合、ボランティア団体が多いが、会議の場面で専門家がたくさん参加している。弁護士は著作権のことにアドバイスを行うなど、専門性を公共施設に生かすような取組も検討する必要がある。続いて、学校の役割についてご意見を伺いたい。

子どもにとっては、公共図書館の司書は大事ではあるが、小学校での担任の先生の影響は大きいと感じる。担任の先生だけで何かできるわけではなく、公共図書館とどう連携していけるのか検討したい。事務局から現在の取組を紹介してほしい。

回答 学校との連携は、かなり以前から実施している。これまでの連携は、学校図書館への資料支援や、図書館職員による出張ブックトークが主流だったが、最近では「人をどう育てていくか」ということに目を向けている。その一環として、京都市図書館の司書と学校司書を対象に、子どもの本の指南役を育てる「子どもの本コンシェルジュ養成講座」や、学校司書のための読み聞かせやブックトークの基礎研修を実施している。これら人づくりについても、公共図書館と学校図書館が連携しながら実施している1つの例だと思っている。これらの研修は、職員の技術や知識の習得に加え、職員同士の交流の場にもなり得る。研修会を開くと、1人職場である学校司書同士が情報交換を行い、公共図書館が学校図書館でどのようなことをしているかを知ることができる。そういった情報共有をすることが、今後の新しい連携に結び付いていくと考えている。

意見 説明いただいた取組と教育委員会関係で言うと、学校では図書館主任を配置しているが、うまく世代交代できていない学校もある。来年度から図書館主任を対象にした研修会を教育委員会が開催することも聞いている。

また、公共図書館とは連携している。一斉貸出で、1クラス分とか学年で借りる等することもあったが、現在は電子書籍もある。府立図書館の電子書籍サービスと紐付けしてもらい、子どもたちが1人1台タブレットで繋がれるようになっている。

学校にない本も、自分のタブレットから検索をかけて調べられるようになっているので学校内だけではなく、公共図書館との繋がりを教育委員会が熱心に取り組んでいただいている。人づくりで言うと、子どもたちが公共図書館で司書のノウハウを学んでおり、それを学校に持ち帰って委員会等で取組を行う等、連携といった部分でも少しずつ前に進んでいると思う。また、「場としての図書館」としては、職場と家と、あと1つ居場所が必要と思っており、サードスペースでリフレッシュすることや、息抜きができると思うが、学校と家との他に安心できる場所として、公共図書館や学校図書館がそういう場所になればいいと思う。

学校だけで考えると難しさや限界がでてくると思うので、公共図書館との連携ができて、たくさん足を運べるようになると、魅力のある図書館になると思う。

意見 公共図書館と学校図書館の選書は違うと思うが、学校司書の選書を見ていると、公共図書館と同じ考えで選書されているところもある。カリキュラムとの関わりがあると思うが学校司書の立場から考えると、あまりカリキュラムに詳しいわけではないので仕方のないことだと思う。そこで、司書教諭との連携がすごく大事になると思う。

棲み分けではないが、公共図書館としての役割、学校図書館としての役割、その間を連携できるようになるのが、今後の課題だと感じる。

今の公共図書館の選書と、ニーズとの関わりというものが、選書の方針で郷土資料中心に集めたり、館によって役割分担があると思うが、専門分野の選書についての考え方について事務局から説明をお願いしたい。

回答 専門的な資料は、公共図書館での購入が難しい場合もある。そのような時には、レフェラルサービスといって、歴史資料館や大学図書館など専門資料を多く所蔵している施設を案内する方法もある。

意見 右京中央図書館の選書についてはどのようにしているのか。

回答 右京中央図書館は京都大百科事典というのを図書館の特徴として掲げている。選書にあたっての課題としては、専門書について言えば、例えば法律関係のものについては法改正があれば入れ替える必要があるが、図書館に専門の担当者がいるわけではない。他の自治体には司法書士の方に力を借りて選書をしている場合もあると聞いている。

意見 自分の経験だが、予算がないという問題は常についてくる。考古学資料館の運営でもかなり苦労した。やはり少ない予算で運営をするには工夫が必要となる。私は文化庁の予算を取ってイベントを実施したことがある。事務が複雑ではあるが図書館であれば、文化庁等から予算を取ることは可能だと思う。文化庁も京都に来たのでうまく活用できればと思う。

意見 官庁に取材に行くがあるが、基本的に人口が減っているので、今後は子ども関連の予算は自然減になる。減になった分を医療等に振り分けていくと報道があった。

京都市の場合は教育委員会が所管しているが、他の自治体では首長部局になる場合もある。京都市は本当に教育委員会が所管しているので学校との連携ができていたので続けていただきたい。予算は工夫して確保をしていただきたい。

図書館は子どもの時はよく利用するが、働き出すと疎遠になる。退職するとまた利用する。最近では電子書籍サービスも始まり 30代から 50代の人たちが借りているということでニーズはあると思う。図書館に行けないが、買いたい、読みたい、使いたいというニーズがある。そのニーズを掘り起こすためにも、馴染みやすいイベントをすることも検討してほしい。例えば夜の図書館でビブリオバトルを開催するなど、図書館との接点を増やしていくことが必要だと思う。新しい図書館として、様々な形を変えたり、守ったり、充実させることが必要だと思う。

自分自身が、国立国会図書館の関西館によく調べに行くが、京都府立図書館との連携はされているが、京都市も連携を進めていただきたい。電子化も進んでいるが、京都市経由でアクセスできるともっと便利だと感じた。

意見 予算の面で厳しいことは知っているが、教育委員会を中心として学校司書との連携なども含めて、今後も充実していただけると信じている。単純に本が好きな人、読書が好きな人、例えば小学校で考えると学校運営協議会の中で図書館支援という形で、本好きな人が集まって学校教育にボランティアとして参加していただいて読み聞かせとかおすすめの本の紹介なども協力していただいている。予算の面で厳しいのであればボランティアに頼ることが良いことかはわからないが力を貸してくれる方もいると思う。

意見 様々な分野の専門家の力を借りて、公共図書館の蔵書を増やしていくことや、予算がない場合は、どのように予算を獲得していくのかも検討して欲しい。

また、ボランティアの方には、図書館にどのように関わっていただくのかということ

が課題になると感じる。

回答 ご意見を伺い、非常に深刻な衝撃を受けた。予算の問題もあり、市長が変わると我々も非常に大きなチャンスだと感じた。

例えば、電子書籍というものがイコール紙の書籍と変わるのか。同じなのかという大きな問題がある。本で調べられないことをインターネットで調べるとすぐに出てくる。例えば中国の古い本を検索して、出てきた内容を確認すると全くのデタラメであったりする。ひとつも信用できないものがまかり通っている。

私は、そこまで電子というものが発達していないと思う。資料館とイコールとは言えない。ただ資料性というものは限りなく大事であり、単なるアミューズメントとしての提供ではない。このように電子に変わるということについては、然るべき発言をすべきではないかと思う。協議会として発言をさせていただいてもいいだろうか。

意見 電子書籍サービスの発達によって、図書館に行くことができない方や、文字を読むことができない方には、読上げ機能などもある。

皆様から色々なご意見ご提案をいただいたので、検討いただきたい。

#### 4 事務連絡

#### 5 閉会